阿蘇郡市中体研

理事長　松永　武人

1　はじめに

これまで阿蘇郡市では，井芹昌文校長（一の宮中学校）を中心に１０校１１名の保健体育科担当で研究を進めてきた。若いメンバーが集まっている阿蘇郡市であるが，積極的にコミュニケーションを図りながら連携を深め，様々な活動に取り組んできた。研究の視点は，昨年度から「自ら学ぶ力」をキーワードに，指導と評価の一体化に目を向けた授業構想を通して，生徒自身が何を学び，何が出来るようになったのかを明確化することであり，そのための実践を進めてきた。

2　研究組織

会長
井芹　昌文校長
(一の宮)

阿蘇郡市理事長
松永　武人(南阿蘇)

研究委員
中野・赤池(阿蘇)、太田(産山)、緒方(西原)、太田黒(小国)、藤本(南小国)、桐原(高森)、荒木(高森東)、赤星(波野)、田嶋(一の宮)

3　活動組織

５月　２日　（火）：第１回阿蘇郡市教育研究会保健体育部会(一の宮中学校)
＜研究テーマ・組織・方向性の検討＞
１１月　２２日　（水）：第１９回熊本県学校体育研究発表大会
（人吉スポーツパレス，カルチャーパレス）
＜授業：「体つくり運動」，球技「バレーボール」＞
２月　１５日　（木）：第２回阿蘇郡市教育研究会保健体育部会
＜研究実践発表：松永　武人　教諭＞
２月　１５日　（木）：阿蘇郡市中体連・中体研反省会
＜本年度の反省と来年度の意向(阿蘇中学校)＞

4　研究テーマ

「わかる・できる喜びを実感し，生涯にわたって運動に親しみ，豊かなスポーツライフを実現するための資質や能力を育てる学習指導と評価の工夫」
～知識の構造化を図る工夫を通して～

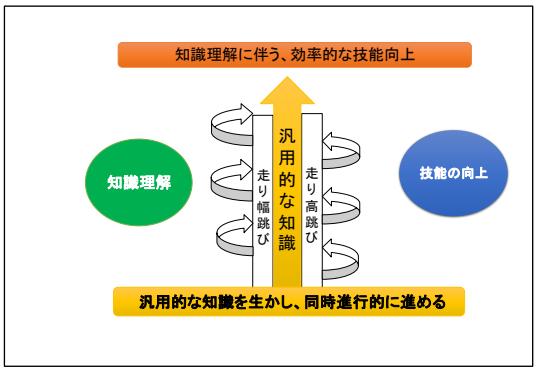
仮説：各領域において、汎用性のある知識を明確化し、授業に生かす取組を通して、教師と生徒が学びを共有し一体的に進めていくことで、「活動あって学びある授業」が達成されていくだろう。
視点１：知識の理解促進　　視点２：技能の向上　　視点３：取組意識の向上

⇩

<POINT>「わかる・できる喜び」を味わわせる授業実践

５　研究の概要

各領域において，汎用性のある知識(マスターキー)を探し，それをどのように子どもたちにおろしていくのか，そして学習活動の工夫を通してどのように身に付けさせていくのかというところに焦点化を図った。知識の構造化を図る授業を展開することで阿蘇郡市として，「わかる・できる喜び」を味わわせる授業を実践していくことを目的とした。



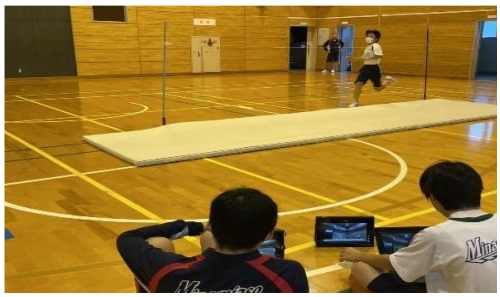
６　研究成果の提案

研究者：松永武人(南阿蘇中学校)　　単元：陸上競技(走り幅跳び，走り高跳び)

本年度は，各学校における取り組みを代表して，松永(南阿蘇中)の授業実践の研究成果を示し，成果や課題を共有するなかで，学びを深める活動を行った。

本研究では，第３学年を対象に，陸上競技において，走り幅跳びと走り高跳びを同時進行的に進め，生徒が両種目に共通する技術ポイント「踏切に合わせた助走リズム」を汎用的な知識として習得し，その知識を活用して効率的に技能を向上させていく授業内容及び展開の有効性の検討を行った。これまで，走り幅跳びと走り高跳びはそれぞれ別の単元で実施することが通常であり，それぞれに８時間程度のコマ数を用いて実施してきたが，共通する汎用性を知識の構造化として単元に落とし込み，あえて同時進行的に実施することで，限られたコマ数でもより効率的な技能習得と，知識の理解を促すことが可能ではないかとの考えをもとに授業を実施し，成果を示した。

７　まとめ



限られた時間の中で，より効率的な技能習得を見込んだ本研究において，同時進行的に進めたことで，生徒は汎用性を生かしながら，それぞれに技能習得を効率的に行うことができた。

また，走・跳運動における取り組み意識の分析では，汎用的な知識として示した「踏切に合わせた助走リズム」を理解し，身体化に向けて意識しながら技能向上へと取り組む様子が見て取れた。また形成的評価分析より，授業を進めるにつれ，評定が右肩上がりに向上し，計画，実践した授業の内容及び展開は有効であると評価できるものであった。研究の成果と課題を示す中で，新たな意見や情報共有を図ることができ，阿蘇郡市として，「わかる，できる喜び」を味わうための視点を深めることができた。